

モニタリング項目に関する変更点について

平成 21 年度第 1 回科学委員会にて提示したモニタリング項目からの主な変更点は以下のとおり。

1. 新規に追加したモニタリング項目

浅海域における貝類定量調査 (No. 6)

評価項目： 「特異な生態系の生産性が維持されていること」
「海洋生態系と陸上生態系の相互関係が維持されていること」

気象観測 (No. 22)

評価項目： 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」

海ワシ類の越冬個体数の調査 (No. 23)

評価項目： 「海洋生態系と陸上生態系の相互関係が維持されていること」

2. モニタリング項目からその他の調査研究に位置付けを変更したものの

サケ科魚類の遺伝的多様性の現状と変化に関する調査

海ワシ類越冬個体群の季節移動、及び人為的餌資源と自然餌資源の利用状況調査

アザラシによる被害調査

3. 個別のモニタリング項目の内容変更

衛星リモートセンシングによる水温・クロロフィル a の観測 (No. 1)

- ・調査内容から流水分布を削除。
- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。

海洋観測ブイによる水温の定点観測 (No. 2)

- ・調査内容からクロロフィル a、流向、流速、塩分を削除。
- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。

アザラシの生息状況の調査 (No. 3)

- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。

海域の生物相、及び、生息状況 (浅海域定期調査) (No. 5)

- ・評価項目に 「特異な生態系の生産性が維持されていること」を追加。

ケイマフリ・ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウの生息数、営巣地分布と営巣数調査 (No. 7)

- ・「調査可能範囲のコロニーでの営巣数調査。あわせて営巣数変動要因調査」と統合し、調査頻度を毎年に変更。

エゾシカの採食圧の把握に関する広域植生調査（No. 11）

- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。

陸上無脊椎動物(主に昆虫)の生息状況(外来種侵入状況調査含む)(No. 14)

- ・評価項目に 「エゾシカの高密度状態によって発生する遺産地域の生態系への過度な影響が発生していないこと」を追加。

陸生鳥類生息状況調査（No. 15）

- ・評価項目に 「エゾシカの高密度状態によって発生する遺産地域の生態系への過度な影響が発生していないこと」を追加。

中小大型哺乳類の生息状況調査(外来種侵入状況調査含む)(No. 16)

- ・調査内容をアライグマの侵入状況調査を主とし、調査頻度は毎年に変更。
- ・評価項目に 「エゾシカの高密度状態によって発生する遺産地域の生態系への過度な影響が発生していないこと」を追加。

河川内におけるサケ類の遡上数、産卵場所および産卵床数モニタリング（No. 18）

- ・調査内容からサケ類の遡上産卵河川数を削除。

淡水魚類の生息状況、特に知床の淡水魚類相を特徴づけるオショロコマの生息状況（外来種侵入状況調査を含む）(No. 19)

- ・評価項目に 「河川工作物による影響が軽減されるなど、サケ科魚類の再生産が可能な河川生態系が維持されていること」を追加。
- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。

利用実態調査（No. 20）

- ・「社会環境の把握（社会環境に関する年次報告書の作成、資料集積）」から抽出。

年次報告書の作成による事業実施状況の把握（No. 25）

- ・評価項目に 「遺産登録時の生物多様性が維持されていること」を追加。

年次報告書の作成による社会環境の把握（No. 26）

- ・評価項目に 「遺産登録時の生物多様性が維持されていること」を追加。
- ・調査頻度を5年おきに変更。

航空機による海水分布状況観測（No. ）

- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。

トドの日本沿岸への来遊頭数の調査、人為的死亡個体の性別、特性（No. ）

- ・評価項目に 「気候変動の影響もしくは影響の予兆を早期に把握できること」を追加。